

伝統的なものづくりを通じた地域創造—和綿で紡ぐひとの環づくり—

研究組織：教育学部 准教授 佐々木和也（代表）

教育学部 教授 清水 裕子

エコ・ハウスたかねざわ 野村 恵子（NPO法人ふるさと未来Sou）

高根沢町住民生活部環境課 片野 秀光

協力：ケアハウス・フローラ、社会福祉法人陽向「陽だまり保育園」、フリースペース・ひよこの家
高根沢町民俗歴史資料館、高根沢町生涯学習課

事業の背景・目的及び意義

エコ・ハウスたかねざわ¹は高根沢町の環境学習の拠点として設置され、環境学習機能（教材提供・講習会・出張授業等）、リサイクルショップ機能、資源ごみ回収事業等を有している。運営は高根沢町が指定する管理者NPO法人「ふるさと未来Sou」が受託している。申請代表者はこれまでエコ・ハウスを拠点に、高根沢町環境課との協働で、伝統染織を中心とした環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより環境意識の啓発を支援してきている²。さらに、これまでの活動に福祉的な視点を持たせようと、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化させる試みとして、在宅介護支援センターの農地を利用して和綿を栽培し、施設を利用する高齢者の園芸福祉活動として試験的に運営してきた。この事業を継続しつつ、和綿文化を継承していくために伝統的な「ものづくり」を通して、ひとの環づくりに寄与することを目的としている。つまり、循環型社会を形成していくには、人（ソフト）の還流が不可欠との町の姿勢と本研究のシーズは一致しているところである。

大学側の資産として、担当教員は人間活動の根源である「衣」領域を主たる専門としており、現在の社会システムでは、ほぼ外部化されてしまった衣生活を問い直し、新たな時代創出のための生

活者のあり方を提唱している。最近では、衣生活環境における感性教育について、「ものづくり」の立場から教材研究を行っている [1]。これまでも、附属小学校の総合の時間において、藍や綿といった伝統染織素材を用いた環境教育の実践研究 [2、3] や、まなびの森保育園ならびに陽だまり保育園との連携で、かかわる力を育む染織活動に関する実践研究 [4、5、6] 等を展開している。

行政側の資産として、エコハウスは高根沢町の環境学習の拠点として設置され、環境学習機能（教材提供／講習会／出張授業等）、リサイクルショップ機能、資源ごみ回収事業等を有している。運営は高根沢町が指定する指定管理者のNPO法人ふるさと未来Souが受託している。本研究を実施する事前の取組みとして、2005年度から伝統染織を中心とした環境学習プログラムを共同で開発し、定期的な学習会を開催することにより、環境意識の啓発に務めている。

このような資産をもつ双方が継続的に共同研究として連携をすることで、地域の環境づくりを牽引するESD学習を推進してきたことは意義深いと考える。本研究では、介護福祉施設の所有する農地において、とちぎコットンボール銀行 [7] の人材を中心に、和綿の栽培収穫作業を施設利用者と協働しながら、本来家庭単位で行われていた伝統的な伝承を、自ら栽培した和綿から糸を紡ぎ、その糸を高齢者が「産着」に仕立てて、地域の子育て世代に還元することで地域活性化を試みている。そこで、今年度は以下の3点について取り組んだ。

1 エコハウスたかねざわURL：
<http://homepage3.nifty.com/ecohouse-t/>

2 里山文化の会URL：
<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?EcoHouse/>

(1) 園芸福祉からみた和綿栽培の意義（継続）

和綿栽培に地域ぐるみで関わることにより、要介護者の福祉的意義を深めるとともに、地域での子育て環境づくりの一環として定着させる。また、今年度はフリースペース・ひよこの家との連携により、不登校児の学習プログラムを検討し、メンタルヘルス面における効果についても考察する。

(2) 産着等の地域内伝承の仕組みづくり

伝統的な和綿文化を「ものづくり」の視点から見つめ直し、子どもの成長を祈願した祈りの衣服「産着」等を、(1)で栽培した和綿から作り、町内で生まれる赤子に着てもらおうという地域内伝承モデルを実現していくための体制づくりを進める。

(3) 国連「生物多様性の10年」への対応

これまでの活動の総括を兼ねて、民俗歴史資料館（生涯学習課）と連携して、企画展「里山のいのちを映す草木染天然の色から生物多様性を感じるー」を開催する。

進展状況

(1) 和綿栽培2011とひよこの家との連携

和綿栽培は2008年に発足した「とちぎコットンボール銀行」が主として行っている。しかし、今年度は東日本大震災ならびに原発事故の影響で、春先の環境イベントが延期になり、またエコ・ハウスの営業もできなかったため、コットンボール銀行の栽培会員を募集することができなかった。そこで、会員の協力で福祉施設の農地に栽培したが、水はけや日当りの関係で収穫ができなかったため、地元保育園との協同開催していた収穫祭を中止とし、後述する地域内伝承のための体制づくりに専念した。

高根沢町が運営する不登校の子どものフリースクール「ひよこの家」が昨年度より積極的に関わってくださるようになり、今年度も栽培活動に関わりをもってもらおうように計画したが、生徒のメンタルケアの関係で校外学習としての

栽培に関わることができなかった。安定的に交流していくには、様々な問題をクリアしなければならないが、教育の観点から園芸福祉としての和綿栽培を模索していく体制づくりを次年度以降も進めることとなった。

そこで、エコ・ハウス施設内の畑で収穫した和綿を提供し、タペストリーづくりプログラムを試行することとした。そのきっかけづくりとして、夏に藍の生葉染法（絹）と生葉還元法（綿）を用いた藍染ワークショップを行った。生徒の伝統染織に対する興味関心を促すこと、本プログラムに関わる大人との信頼関係を築くことが主たる目的である。同じように行っても染まる色が異なることに会話が弾み、互いにその色を認め合う活動となった。



図1 藍の生葉染を楽しむ生徒と職員

次に、タペストリー製作のための緯（よこ）糸づくりをするための紡ぎ講習を行った。説明は申請代表者が行い、指導は里山文化の会員が担当し、市民による教育支援活動として展開することで、会員の日頃の成果を社会に還元する場とした。生徒にとっても親近感が沸き、リラックスした教育の場を演出することもできたと考ええる。



図2 里山文化の会による糸紡ぎ講習

ワカモノ・フェスタ³への出展を目標に、紡いだ糸（白・茶）と里山文化の会が提供した藍染糸の3色を用いての創作布（タペストリー）づくりを行った。流木を利用して織物枠を作成し、経（たて）糸はタコ糸を利用した。枠は「ひよこの家を支える会」に製作を依頼し、整経は里山文化の会が担当した。インフルエンザの流行や生徒のメンタル面の不安定から思うように製作は進まなかったが、フェスティバル当日は製作の途中経過の写真等と一緒に展示し、来場者の多くからその取組み（プロセス）が評価されたと職員から報告を受けている。



図3 流木を利用したタペストリー製作の様子

本プログラムにより和綿の栽培についても理解が得られたことから、来年度以降も栽培への関わりを定常化するための支援のあり方を検討したい。また、生徒のメンタルヘルス効果については、プログラムの改良と共に検討していく必要がある。

3 ワカモノ・フェスタ実行委員会URL：
<http://wakafes.org/>

(2) 和綿文化の地域内伝承の体制づくり

昨年度は、里山文化の会の会員（ニット講師経歴有）を中心に、里山文化の会の会員が紡いだ和綿糸100%の産着を試作し、福祉施設利用者へ見本を示した。これを動機として、編織物を手づくりすることを通して、地域の子ども達に関わることから生き甲斐を創出し、そのことが和綿文化を継承することに繋がることを説明し、12月から2月に4回の体験日を手芸クラブの活動として設けた。

【手織り機の訓練】

高機（たかばた）の経験者が2名いたことから、まずはリーダー的存在を確保するために、経験者から手織り訓練を始めた。最初はぎこちない様子であったが、徐々に昔の感覚が蘇って来たのか、こわばっていた顔つきが徐々に解れていった。しかし、経糸の開口が足踏みではなく、手動レバーのため混乱する様子も観察された。今回は四枚綜こうで平織としたため、奇数番号レバー「1」「3」と偶数番号レバー「2」「4」を同時に上げ下げしなければならないため、操作に慣れるのに時間がかかったと思われる。施設利用者は足腰の筋力が落ちているため手動レバーを利用したが、オプションの踏み台をつければ本来の高機と同じ作業性となる。来年度は足踏みでの作業性も検討したいと考えている。また、非経験者も訓練風景を見学すると、子どもの頃の親や祖母の織物作業風景を思い出し、コミュニケーションが盛んになるのも特徴的であった。伝統的なものづくりが実生活の中での風景であるため、連想記憶として貯蔵されやすいためと考えられる。



図4 機織訓練の様子

【指編みによるマフラー製作訓練】

織物は織機が必要であるため、日常的に作業療法的効果があると思われる指編みを取り入れ、編物を製作する意欲を高めるようにした。今回は、指編みの基礎であるリリアン編みを取り上げ、順序性・規則性を理解しながら、指先ならびに関節の柔軟性を取り戻すことに傾注しながら作業してもらった。

図5は4回目の作業の様子であるが、約1時間半で1メートルの紐を3本編むことができるようになった高齢者である。この方は左側に麻痺が認められ、最初の頃は指を曲げて編みを作ることができなかった。しかし、約3ヶ月で写真のように指を曲げることができるようになり、本人の申告では掌や指先が大変温かくなるとのことであった。



図5 指リリアン編みの様子（左に麻痺がある）

最後に、出来上がった3本の紐を三つ編みにしてマフラーに仕立てて、達成感を味わってもらうことで来年度への動機づけとした。



図6 完成したマフラー

(3) 企画展の開催

里山文化の会の発足から5年が経過し、その節目として国連生物多様性の10年に合わせて、企画展「里山のいのちを映す草木染」を高根沢町民俗歴史資料館において、6月28日から7月24日までの1ヶ月間開催した（図7）。里山文化圏において、生活で様々な利用がなされてきた草木の色から、里山の現代的価値を再認識してもらい、本事業を含めた地域活動の成果を発表しようと企画したものである。展示した染色物は5年間の活動の成果であり、工芸的な要素は排除し、身近な草木から得られる色から、生物の多様性を感じてもらえるよう配慮した。なお、本企画は下野新聞ならびに栃木読売に掲載され、県外からの来場者もあり、会員の志気も多いに高めることができた。また、期間中に開催した2回のワークショップ（ヤブマオのエコバックづくり、藍の生葉染）は定員を上回る盛況ぶりであり、こちらも県外からの参加者が多数見られた。

事業の成果

本年度は、和棉を用いたものづくりによる地域活性化として、不登校児童・生徒のための体験型学習プログラムの開発とその効果について知見を得ることができた。これらは大学にとって、特別支援学校での作業プログラムとしても応用することができ、本学の教育個性化プロジェクトに採択された「知的障害教育における藍染め作業の実践」などと連携することが可能である。また、和綿文化の地域内伝承のための体制づくりでは、編織作業による福祉効果が見出され、地域の高齢化に対応する研究領域のシーズとなる可能性もある。

一方、自治体側の成果としては、これまでエコ・ハウスの里山文化の会のための環境教育プログラム「糸から衣生活を見直す」「衣生活から共生をめざす」「糸にいのちを吹き込む」をベースにし、地域の活性化に寄与する活動実践を行うことができた。とくに今年度は、フリースペース・ひよこ

の家の自立支援を和綿栽培を通して促す可能性も広げることができた。そして、高齢者の編織作業の指導や企画展の開催を主として会員が行うことで、会員相互のやりがいも大きくなってきている。これらは町の協働による手間ひまかけた地域づくりの方向性に合致した市民教育に貢献するものである。

なお、これまでの成果として、日本感性工学会大会にて「和綿を用いた地域づくりの試み－生涯教育におけるものづくり」と題して発表した [9]。



図7 企画展の様子

参考文献

- [1] 佐々木和也、箕輪祐一、清水裕子：里山におけるものづくりの感性に学ぶ環境教育に関する一考察、感性工学研究論文集、Vol. 5、No. 4、pp.103-107、2005
- [2] 佐々木和也、清水裕子：環境感性の育成をめざしたものづくり環境教育の実践的研究、日本感性工学会第8回大会予稿集CDROM版、2007
- [3] 清水裕子、佐々木和也：里山を利用した「もの」「ひと」をつなぐ感性教育・環境教

育、平成17年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤C）研究成果報告書、2007

- [4] 保坂里絵：「ひと・もの・こと」とかかわる力を育てる遊びの実践研究、宇都宮大学大学院教育学研究科修士論文、2007
- [5] 保坂里絵、佐々木和也ほか：藍と綿の栽培から染織活動への展開過程における保育効果の検証、国際幼児教育研究（国際幼児教育学会誌）、Vol. 16、pp. 75-84、2009
- [6] Kazuya Sasaki, Yuichi Minowa, Hiroko Shimizu: "Possibility of Environmental Education through Natural Dyeing and Weaving", Proc. of the 2nd International Conference on Kansei Engineering and Affective Systems (KEAS'08), Nagaoka University of Technology (Japan)、pp. 93-95、2008
- [7] とちぎコットンボール銀行ホームページ：
<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?Cotton>
- [8] 佐々木和也、清水裕子、野村恵子、片野秀光：和綿を用いた衣生活文化の地域内伝承による地域再生、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、Vol.33、pp. 283-288、2010
- [9] 佐々木和也、清水裕子、野村恵子：和綿を用いた地域づくりの試み－生涯教育におけるものづくり－、第13回日本感性工学会大会企画セッション「ものづくり教育と感性」